

「タラス・ブーリバ」とウクライナ危機

COLUMN

県内
大学発

経世済民

606

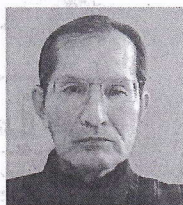
埼玉学園大

帝政ロシア時代の小説家ニコライ・ゴゴリの作品「タラス・ブーリバ」(1835年発表)といえば、ウクライナ・コサックの長タラスとその2人の息子たちとの葛藤の物語である。ロシア正教徒がそこで迫害されていることを知り、タラスは2人の息子を伴ってコサック軍を率いて宿敵ポーランドに遠征する。しかし次男アンドリーはキエフで知り合ったポーランド貴族の娘と恋に落ち、父を裏切つて敵の要塞(よつさい)の守備隊に加わりの騎兵隊長として刃向かう。乱戦のさなか、タラスはアンドリーを自らの手で討つ。敵に取り囲まれたタラスは、味方

の救援で辛つて脱出するが、駆け付けた長男オスタップは捕虜となり連行された首都ワルシャワで拷問を受けたのち処刑される。潜入したワルシャワで長男の最期を目撃したタラスは復讐(ふくしゅう)に燃え、再びコサックの大軍を率いてポーランドに攻め入り残虐非道の限りを尽くした末に非業の最期を遂げるのである。

ウクライナ出身の作家ゴゴリは、この作品でヨーロッパ世界への憧憬と憎悪というロシア人やウクライナ人の心に歴史的に深く刻まれたアンビバレンスを、コサックの父子の悲劇として見事に造形化した。

伊藤 栄晃 人間学部 教授



ローマ・カトリックを奉ずるポーランド、そしてその貴族の娘はヨーロッパ文化の象徴であり、次男アンドリーはそれに引かれる心情を、そして父タラスがそれを拒絶し憎悪する心を、それぞれ表している。優れた西方世界の文化に魅惑されながらも、東方スラブの伝統を捨てようとする同胞を「父なるロシア」は決して許さないのである。このロシア世界のアンビバレンスを理解することは、現在ウクライナを舞台に展開している問題を理解する上で重要である。

ウクライナ危機は、係争中の東部2州のウクライナからの独立をプーチン政権が承認し、それに応じて米欧が経済制裁を足す。今のところロシア・ウクライナの人々の態度は、驚くほど

冷静で理性的でさえある。戦争の直前期に国民の間にはしばしば観察される好戦的な高揚感やパニックからは、大方は注意深く距離を置いているように見える。2度の世界大戦とロシア社会主義革命期の内戦とで戦場と化し幾度も塗炭の苦しみを味わった人々の英知が、そこに見いだされる。しかし彼らの心に潜むアンビバレンスがいったんバランスを崩し、西方世界への敵対心に火が付けば、一体誰がそれを制御できるというのか。殺戮(さつりく)の器と化したタラスを制止できる者はいるのか。文化はもちろん経済も軍事も物流も人流もグローバル化した今日の世界が、2人の息子と夫とを失ったブーリバ夫人の悲嘆にまったく応えられなかったならば、人類の歴史の「進歩」とはなんとむなし

いつ・ひであき 1958年生まれ。東北大学経済学部卒。東北大学大学院経済学研究科博士前期課程満期退学。経済学修士。関東学院大学経済学部講師、助教授を経て関東学院大学大学院経済学研究科教授。専門は西欧経済史。主な著書に『近代英国社会史序説―歴史叙述の作法における19世紀と20世紀―』(大学教育出版)、『知的源泉としてのマルサス人口論―ウィクトリア朝の社会思想史の一断面―』(共著、昭和堂)など。